

もよし

ほんぼりみる喰の拵やう

みるくひ貝よく湯煮して布にて包みて、上より打てもみほぐし、ふくめたるなふくめといふの様になる、又口の赤みの所はほぐれず、其所はずぬぶん細にたゝきて右のふくめの内へませてよし

ほし海扇つかひやう

ほしたるほたて貝は指にて極めてはそくさきて水にひたしおき柔らかくなりたるを、水より取上て酢醬油にて味をつけて、又味噌の煮返したるをも少しくはへてもちいてよし

穂蓼つけやう

八月頃よき時分、桶に鹽を少しぬり穂蓼を次第にならべて少づゝ鹽をふり、おもしろしをかけ、一ときばかりすぎで、めしのとり湯一升到鹽五合ほどかき

ませてひたしくになるほど入ておもしろかけておきてつかふとき洗ひて出すべし

### 看護法 (承前)

醫學士 長瀬復三郎

斯ふ云ふ疾病に罹つた子供を見た時は必ず先き御話をした胸圍、頭圍等を計つて見ねばならぬです。一寸見た模様病氣に罹つて居る外見上、ドウ云ふものであると云ふに子供に病氣があると云ふ事について子供が機嫌が悪ひと云ふ事は一番に見た所で氣の付く事で、健康なる子供であれば、實に爽快な顔をして天真爛熳と云ふ有様で能く遊びもなし、アヤせばよく笑ふと云ふ具合であります、又光線音響とかさう云ふものに向つて、或は見ずしらずの人に對しての感覺が病時の如く

に頭敏でない、四五歳の子供の顔の色を見て顔付が腹膜炎とか肺炎とか云ふ病氣を有つて居るものは、疼痛があるとか云ふ事が顔色に現はれて居る、又慢性の病氣で腸加答兒とか胃加答兒があるものは大變疲勞したやうな苦しみのあるやうな顔をして居るものである、又腦膜炎のやうな子供であれば容貌が變つて仕舞ふて無慾の状態を呈して居る、萎縮などの子供を見れば子供か老人か判らぬやうに顔に皺が寄つて居る、又子供の泣聲、それも大に關係する、子供の泣くは教育が悪くて我儘の子供は別であれども赤兒にしても大くなつてからでも、泣くは何か不愉快な事があるからで、其泣聲が子供は唇で大なる聲を出して持續性に泣くものである、高い聲を以て泣く時は乳が欲しいとか、飲み物が欲しいとか云ふ

有様を現はして泣く、其聲は高い調子でなくして聲がカスつて居るとか、其泣聲が續かずして切れ／＼に泣くとか云ふ時には、痛みでもある時である。斯う云ふ事は申さぬでも犬が驚いて吠ゆると、泥棒を見てなくと、火事の半鐘を聞いてなくと、判るやうに子供の泣方も判るものと思ふ、聲が枯れて居ると喉頭の病氣、實扶的里亞の様な咽喉に異状のある事が判る、又高い聲を出して泣くけれども號泣して四隣に響き渡つて、すかしても聞かぬやうな事は腦水腫のある子供にある、クルーブと言つて昔云ふ馬痺風、彼の病氣になれば丸で聲が出ぬ、又肋膜炎とか腦膜炎とか云ふものになれば聲を出せば痛みがあるとか苦悶があると云ふ所から聲を出さぬ有様もある、又腦に病氣があれれば何か物に驚き易いと云ふ模様で同じやうな言葉

を繰返すと云ふ事もござります。

皮膚の色光澤にしても、少し病氣であれば色光澤の赤い色が無くなつて、速に衰弱の模様が出て来て皺が出来るとか或は尋常に異なつた色光澤を現はす、重症の腸加答兒でもあつて、多く下痢でもした子供は色光澤も悪く、脂肪分も缺けるから眼も早く凹むとか、色も悪く、手足も血液の循環が悪くなつて冷たくなる、黄疸のやうな病氣ならば結膜とか、皮膚にしても唇にしても黄色を呈して來ますし、又傳染病の格魯布の呼吸困難のつゝ、時としても或は血行病でもあるものは「チアノ―ゼ」(紫紅色)でも現はるゝとか、神経系統の疾病には皮膚の知覺が過敏になつて何處に障つても痛いとか、又麻疹とか猩紅熱とかさう云ふものになれば斑點狀に赤い色が出て來る、兎に角皮膚の

色光澤も一のより所となる。

(以下次號)

或母の日記 (第三回)

無名氏

生後七八ヶ月間の記事

(即ち三十四年四月より五月に至る)

三月中旬、母の實家に行き滯留すること一ヶ月、四月十二日に歸り來る宅につききて、父や婆さんを見て知らぬと云ふわけか泣きて大に困らせた。次ぎの日平生親しくゆき、せる某の家に至る。又人々の顔を見廻はして泣く。此くの如くして五月の末に至る、六月に入りてより他人を見ても泣かぬやうになれり。

母の實家より人形三つがらゝ布袋等の玩弄物を貰ひ來る、宿の婆さんよりもがらゝ一つ貰